

Japanse vereniging  
voor de studie van

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

japonaise  
ges

第5号  
2017年5月

che Vereinigung  
belgische Studien

Association japonaise  
d'études belges

# 日白修好150周年記念シンポジウム開催報告

昨年12月、3日間にわたり開催された「日白修好150周年シンポジウム」は、総勢53名が登壇、のべ参加者数も400名を超え、無事盛会のうちに終えることができました。開催にあたり、会員の皆様には多方面にわたりご協力いただきました。この場をかりて御礼申し上げます。

日白修好150周年記念シンポジウム実行委員会

## 実施概要

名 称: 日白修好150周年記念シンポジウム「文化・知の多層性と越境性へのまなざし  
—学際的交流と「ベルギー学」の構築をめざして—

日 程: 2016年12月9日(金)～11日(日)

会 場: 東京理科大学、在日ベルギー王国大使館

主 催: 日白修好150周年記念シンポジウム実行委員会

共 催: 日本ベルギー学会、ベルギー研究会、東京理科大学

協 力: 在日ベルギー王国大使館、日本・ベルギー協会、ブリュッセル研究所、ANA

後 援: フランダースセンター、ベルギー観光局ワロン・ブリュッセル、ワロン地域政府 貿易・外国投資振興庁、  
ネーデルラント美術研究会

参加者: のべ409名(12月9日の参加者数を除く)



## プログラム

### 2016年12月9日(金) (プライベート)

日白修好150周年記念コンサート

Part I

上野耕平、AKIマツモト(通訳: 守田絢子)

Part II

Sop. 蔵野蘭子、Pf. 飯野明日香

Vn. 磯絵里子、Pf. 大宅さおり

### 2016年12月10日(土)

開会挨拶

藤嶋昭(東京理科大学学長)

ギュンテル・スレーワーゲン(在日ベルギー王国大使館)

石井正文(駐ベルギー日本大使) <ビデオメッセージ>

北原和夫(日白修好150周年記念シンポジウム実行委員会代表/東京理科大学教授)

基調講演 1

「日本の歴史に於けるベルギー像の多重性」

ウィリー・F・ヴァンドゥワラ(ルーヴァン・カトリック大学  
名誉教授)

基調講演 2

「ピーテルブリューゲルの《ネーデルラントの諺》と近世  
日本の諺画の比較」

森洋子(明治大学名誉教授・ベルギー王立考古学アカ  
デミー外国人会員)

分科会①※

懇親会

※ 詳細次頁参照

### 2016年12月11日(日)

分科会②、③※

パネルディスカッション

「ベルギー学の創出: 文化の多層性と越境する知の創造力」

パネリスト: 北原和夫(東京理科大学)

岩本和子(神戸大学)

高木陽子(文化学園大学)

ディミトリ・ヴァノーヴェルベーク

(ルーヴァン・カトリック大学)

司会: 武居一正(福岡大学)



## 分科会プログラム

		A	B
<b>分科会①</b> <b>2016年12月10日(土)</b>	教室:	<b>オイペン (F506)</b>	<b>リエージュ (F502)</b>
	司会:	鈴木 義孝 (関西大学)	斎藤 至 (東京大学出版会)
	15:50-16:20	コマーシャル・ミュージアムにみる明治期の日白関係 三宅 拓也 京都工芸繊維大学	低地地方(ベルギー・オランダ)が欧州統合に果たした歴史的役割 奥西 孝至 神戸大学
	16:20-16:50	日本における高等商業教育の導入とベルギー 大槻 忠史 群馬大学	ヨーロッパ統合とベルギー政治 正躰 朝香 京都産業大学
	16:50-17:20	日白修好通商航海条約に関する歴史社会言語学的考察 石部 尚登 日本大学	ブリュッセル学 何がブリュッセル的か 小川 秀樹 千葉大学
17:20-17:50		ベルギーにおける移民政策の展開 中條 健志 大阪市立大学	

		ルーヴェン (F501)	オイペン (F506)
<b>分科会②</b> <b>2016年12月11日(日)</b>	教室:	大久保 信行 (中央大学)	斎藤 至 (東京大学出版会)
	司会:		
	10:00-10:30	ダミアン神父と後藤昌直医師:ハンセン病に立ち向かった2人 湯地 晃一郎 東京大学医科学研究所	日白修好150周年の法学史—日白修好通商航海条約から日欧EPAまで 牛嶋 仁 中央大学
	10:30-11:00	昭和天皇の生物学ご研究を通じたベルギーとのご交流 並河 洋 国立科学博物館	失われた民主主義への道:明治日本の司法制度の近代化における小国ベルギーの影響 ディミトリ・ヴァノーヴェルベーク ルーヴェン・カトリック大学
	11:00-11:30	印刷革命がはじまった—プランタン=モレトウス博物館との交流を通して 中西 保仁 印刷博物館	
11:30-12:00	Innovation through the Digitization of Design and Manufacturing Wim DESMET Katholieke Universiteit Leuven		

		ルーヴェン (F501)	オイペン (F506)
<b>分科会③</b> <b>2016年12月11日(日)</b>	教室:	大久保 信行 (中央大学)	斎藤 至 (東京大学出版会)
	司会:		
	13:30-14:00	メルカトルとオルテリウスの地図と地図帳にみる日本との関わり 島津 俊之 和歌山大学	国家改革における憲法裁判所の役割 武居 一正 福岡大学
	14:00-14:30	今こそ、ベルギービールに学ぶ 渡 淳二 サッポロホールディングス株式会社	ベルギーにおける立憲君主制の意義と可能性 矢島 基美 上智大学
	14:30-15:00	ベルギーとカリヨン 田村 紘三 元株式会社カリヨン・センター	公文書館から見た「民主主義」の今—ベルギーと日本— 笹川 武 内閣府
15:00-15:30		合意型デモクラシーとしてのベルギー政治 津田 由美子 関西大学	

C	D	E
<b>ルーヴェン (F501)</b> 岩本 和子 (神戸大学)	<b>ヘント (F503)</b> 平岡 洋子 (明治学院大学)	<b>モンス (F508)</b> 山口 博史 (都留文科大学)
ローデンバックと日本  村松 定史 元名城大学	初期ネーデルラント絵画の「豊かな世界」  荒木 成子 清泉女子大学	日本再宣教とベルギー人神父・・・キリスト教美術の観点から  蛭川 順子 関西大学
ローデンバックの写真小説  塚本 昌則 東京大学	La peinture flamande du XVe siècle, un phénomène international (国際的現象としての15世紀フランドル絵画) [通訳つき]	姉妹都市提携にみる日白交流の展開とその意義  井内 千紗 国際短期大学
翻訳・再話の中で失われたもの—日本におけるモーリス・マーテルリンク『青い鳥』の新たな解釈の可能性を探る—  内田 智秀 名城大学		越境する日本とベルギー：グローバルファッション史を変えた二つの小さな国家  高木 陽子 文化学園大学
フランドル地域における子どもの本—『フランダースの犬』だけではなく—  野坂 悦子 翻訳家・作家	Didier MARTENS Université libre de Bruxelles	

リエージュ (F502)	ヘント (F503)	モンス (F508)
高橋 信良 (千葉大学)	鈴木 伸子 (小金井市立はげの森美術館)	村上 一基 (東洋大学)
精神科医の SF 小説—ステファヌ・オータンことエチエンヌ・ド・グレーフによる知の越境の軌跡—  梅澤 礼 立命館大学	転用と独創のあわいで：ヤン・ファン・エイク作《ロランの聖母》について  佐藤 龍一郎 東京大学	都市圏外への移住経験を聞き取る—ブリュッセルの郊外化・逆都市化過程から  山口 博史 都留文科大学
アンリ・ミショーと「ベルギー性」  田母神 顯二郎 明治大学	メルボルのヴィクトリア国立美術館蔵《キリストの奇蹟の祭壇画》—画像解釈と制作年代—  平岡 洋子 明治学院大学	ベルギーの田園都市  平岡 直樹 南九州大学
ダルデンヌ映画の女性像  吉村 和明 上智大学	ルネ・マグリットの《迷子の騎手》(1926年)における墓地の記憶  吹田 映子 筑波大学	ベルギーにおける生涯学習の実態、貧困層のための言語教育を中心に ルート・ヴァンパーレン 筑波大学 ジョナサン・ハリソン 日本大学
小説家トゥーサンと日本の緊密な絆  野崎 歆 東京大学		ベルギーの芸術家村におけるルーラル・ジェントリフィケーション—シント・マルテンス・ラーテムを事例として—  飯塚 遼 秀明大学

リエージュ (F502)	ヘント (F503)
岩本 和子 (神戸大学)	鈴木 伸子 (小金井市立はげの森美術館)
La circulation internationale des écrivains belges francophones (ベルギー仏語作家の国際的流通) [通訳つき]  Paul ARON Université libre de Bruxelles	ヴァン・デ・ヴェルデと「アール・ヌーヴォー」の初期思想—フランスとの関係から—  白田 由樹 大阪市立大学  日本美術とベルギーのアール・ヌーヴォー：ブリヴァ・リヴモンのポスター作品に見るハイブリディティについて  トゥーレン・サスキア 文化学園大学
Japan as a « Striking of a Gong » for the Early Belgian Literary Avant-garde (around 1870)  Clara SADOUN-EDOUARD Université libre de Bruxelles/Kobe College	コンスタンタン・ムーニエと日本  迫内 祐司 小杉放菴記念日光美術館
	19世紀ベルギーにおけるアジア楽器の収集と展示 (発表はキャンセルとなりました。)  夫迫 知佳子 広島文化学園大学



## シンポジウムを終えて

分科会(自然科学系)

大久保信行

自然科学分野、特に私が所属している工学技術分野ではベルギー固有というよりも世界共通を目指しているので「ベルギー学」構築へ向けて講演者を探すことに苦労しました。また、ベルギー研究会、日本ベルギー学会において今まで自然科学分野の講演も少ないため、他の人文社会分野では講演者を公募し、広い範囲からの応募があったのに比べ、私の方で予め企画を立てて実施しました。そこで自然科学分野の中の学問分野別に候補者を探すことにしました。プログラムにあるように、「医学」、「生物学」、「印刷技術」、「ものづくり」、「地理学」、「醸造学」および「鑄造学」からの講演を依頼することができました。今回は150周年を記念することに主眼をおき、いかにベルギーと日本の間で研究交流があったかについて紹介頂きたい、と講演者にお願しました。

ベルギーというと、チョコレート、ビールなどあまり最先端の科学技術とは無関係というのが一般の方の印象と思いますが、ベルギーの大学では実際には非常に高度な研究が行われ、多くの日本人の研究者が留学されています。また、ビジネスとしても日本企業の多くがベルギーに拠点をもち、新規の技術開発にアンテナをはっています。特にベルギーの大学を卒業した若者は、少人数のベンチャービジネスを立ち上げる機運が強く(これは大国＝大企業に挟まれたベルギー固有)個性的な活動を展開しているので関心が高くなっています。

今回のシンポジウムにおける自然科学分野での講演が新たなベルギーと日本との研究交流促進にお役に立てれば企画したものとして大変幸せです。

分科会(社会科学系)

中條健志

社会科学分科会は、一日目は「リエージュ」、二日目は「オイペン」を会場におこなわれ、合わせて10人の報告者による研究発表があった。経済学、社会言語学、政治学、法学など分野は多岐にわたっていたが、日白関係にかんする報告以外にも、国家改革、政治制度、移民政策、欧州統合など、今日的なテーマが並んだこともあってか、二日間ともに非常に多くの方がたに参加いただくことができた。どの時間帯も常に20~30人以上の聴衆が詰めかけ、なおかつ発表後の質疑応答も盛んであったといえる。こうした学際的な研究集会では、各人の関心や分野、また依拠する方法論がそれぞれ大きく異なるために、質問後の議論が迷走することもしばしばである。しかしながら、本分科会では、自身の専門外の内容にたいしても、報告者の立場や論点を確認したり、あるいはそれらについて建設的な批判をおこなったりするものが多く、シンポジウムの趣旨に適った研究交流の場が生まれていたのではないかと思う。全日程で司会を務め、必要に応じて通訳も担当し、またタイトなスケジュールの中、スムーズに分科会を進行して下さった斎藤至氏(東京大学出版会)にはあらためて感謝申し上げます。

分科会(人文系<文学・言語芸術>)

岩本和子

C分科会は2日間にわたる3セッションとも人文系の文学(言語芸術)を核としつつ、他芸術ジャンルとの領域横断的な方法論や日白比較も視野に入れた、いずれも意欲的で刺激的な研究発表と議論の場になった。第1セッションでは19世紀末象徴派詩人ローデンバックの日本美術や写真との関連に注目した貴重な資料紹介や分析、メーテルランク『青い鳥』の日本受容と邦訳によるテーマ解釈のずれ、フランドル(オランダ語)児童書の紹介などがあった。また第2セッションでは、SF小説と精神医学理論、ミショーの詩学に日本の伝統美術をも媒介したベルギー性を探るもの、現代ベルギーを代表する映画監督ダルデンヌ兄弟における女性像の分析、日本で格段の人気を得たトゥーサンの一連の小説と日本の関係などの発表があった。日本でのローデンバック研究の第一人者、オランダ語絵本翻訳者、映画監督と親しい研究者、小説家の全作品の邦訳者、発表テーマに関する書籍執筆者といった、第一線の研究者による貴重な発表の数々であった。第3セッションではブリュッセル自由大学(ULB)ポール・アロン教授をお招きし、ベルギー諸作家の国際受容に関して、作家との接触や翻訳の重要性についての指摘や多くのデータと共に示唆に富むお話をしていただいた(フランス語発表、通訳付)。アロン教授の元学生で現在の共同研究者からは、19世紀末の前衛文学の日本導入について英語での発表があった。C分科会では発表者数・内容とも充実し専門的な深い議論ができた一面、全体を通して参加者が15~20名と少なめであり、また仏文学会の延長のような雰囲気にもなった。元々研究者に限られているとはいえ、オランダ語文学(芸術)に関する発表が1名だけというアンバランスは非常に残念であった。また「ベルギー学」構築のための領域横断性、多様性を本分科会だけでは実感しきれなかったことも残念で、今後の課題としたい。



#### 分科会(人文系<美術>)

吹田映子

分科会D(美術)では二日間で8名の発表があった。うち半数が15-16世紀のフランドル絵画を対象とし、この領域に蓄積された研究の層の厚みを感じられた。一日目は、まず荒木成子氏がヤン・ファン・エイクらの作品を例に、小さな画面にいくかに多くの情報が込められているかという点からフランドル絵画の「豊かさ」について提示した。続くディディエ・マルテンス氏の発表では、フランドル絵画が同時代のヨーロッパにおいて国際的に受容され、多大な影響を及ぼしたことが様々な事例から明らかにされた。二日目はより詳細な作品分析が主となり、佐藤龍一郎氏はヤン・ファン・エイクの《ロランの聖母》を取り上げ、描かれたロランの服装を分析することで制作年代に関する提起を行った。また、平岡洋子氏は15世紀末のブリュッセルで集団制作された《キリストの奇蹟の祭壇画》について、構図の特異性に注目しながら同時代の史実と突き合わせ、政治的プロパガンダを明らかにした。続いて報告者の吹田は、絵画という同じメディアを用いつつも時代的には4世紀も下ったルネ・マグリットについて、デビュー作《迷子の競馬騎手》の主題が時間表現の否定であるという見方を確認した上でバージョンの比較を行い、幼い頃に親しんだ墓地が場面設定である可能性を指摘した。

二日目の午後はマグリットから時代を少し遡って19-20世紀が焦点となり、工芸品やポスター、彫刻など、絵画以外のメディアに取り組んだ作家たちが対象となった。白田由樹氏は「アール・ヌーヴォー」とその提唱者アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデとの関係を精査し、理念として掲げたこの言葉が次第に「フランス的なもの」に回収されてゆくにつれ、そこから距離を取った経緯を明らかにした。一方トゥーレン・サスキア氏は、アール・ヌーヴォーに取り入れられた日本芸術について、プリヴァ・リヴモンのポスター作品を通して考察した。ここに至ってベルギーと日本との文化交流が俎上に載り、続く迫内氏の発表では、対照的に日本におけるベルギー芸術の受容が主題化された。氏は、コンスタンタン・ムーニエが戦前の日本においてプロレタリア美術として受容された経緯を説明した上で斎藤素巖の彫刻作品を取り上げ、より幅広い受容がなされていたことを指摘した。

#### 分科会(日白交流)

鈴木義孝

この度のシンポジウムでは私は分科会の担当および司会をさせていただきました。私がかかわった分科会では、芸術的な面など様々な観点での日白交流史の研究からベルギーの都市研究にいたるまで多くの興味深い研究発表がおこなわれました。日白交流史についての発表では、本当にさまざまな点において日本はベルギーから影響を受けているということを再認識することができました。都市研究の分科会では、ベルギーにおける都市の変化など普段、私自身の研究では出てこない内容を聞くことができ非常に興味深く感じました。

そして、どの発表にもさまざまな研究分野を持つ方がたくさん聞きに来られました。このように、専門分野の異なった方が、ベルギー・日本というキーワードのもとで一堂に会し、研究発表に参加し活発に質疑応答・意見交換をおこなった今回のシンポジウムは、非常に有意義な場だったという印象を私は強く持ちました。というのも、今回のシンポジウムは、テーマごとに分科会を設けてはいるものの、全体的に見ればある特定の分野に限ったものではないため、さまざまな専門分野を持つ方が来られていました。そのため、質疑応答に関しても、発表内容を専門とする方の視点とはことなった質問などもあり、そこから発表者の方も刺激を受けておられたように感じました。普段の研究会でも、いろいろな分野の方の研究発表を聞き、議論が交わされますが、さらに多様な専門を持った方が参加し議論する、このような大規模なシンポジウムに参加でき、刺激に満ちた経験ができました。次のシンポジウムでもこのような良さが維持されればと感じています。



## 研究会の記録

2016年3月から2017年3月にかけて、西宮、東京、名古屋、ブリュッセルにて、計6回研究会を開催いたしました。

### 第64回研究会

日時: 2016年3月3日(木)13:30-18:00

会場: 神戸大学ブリュッセルオフィス

【発表1】「世紀末リエージュ新聞Caprice Revue について」

岡本夢子(京都大学・リエージュ大学)

【発表2】「ヴィクトール・オルタとアール・ヌーヴォーの誕生—彼の椅子(1893-1912)に関する初の詳細な分析的研究—」

小田藍生(ブリュッセル自由大学・早稲田大学)

【発表3】「ベルギーにおける移民政策の変遷」

中條健志(大阪市立大学都市文化研究センター)

【発表4】「ベルギーのクルド人、クルド人にとってのベルギー」

松井真之介(神戸大学大学院国際文化学研究所国際文化学研究推進センター)

【発表5】「初期近世におけるネーデルラント芸術家の離散(ディアスポラ)とネットワーク—ヘルドルプ一族の事例を中心に—」

河内華子(大阪大学)

### 発表要旨

#### 「世紀末リエージュ新聞Caprice Revue について」

岡本夢子

19世紀末、ベルギー・フランス語文学は文芸誌による扇動によって近代化を果たした。なかでもリエージュを拠点とした『ワロニー』(1886年～1892年)はフランス象徴主義との結びつきが強く、ヴェルレーヌ、マラルメをはじめとした代表的詩人たちも寄稿した国際的な新聞であった。同時期リエージュではCaprice-Revue(1887年～1889年頃)という週間新聞が刊行され、『ワロニー』と共通する寄稿者が記事を寄せているが、これを対象にした研究は少ない。今回は『ワロニー』との比較などによって、このCaprice-Revueの位置づけを試み、リエージュ発行の文芸新聞の地域性について考えてみたい。

#### 「ヴィクトール・オルタとアール・ヌーヴォーの誕生—彼の椅子(1893-1912)に関する初の詳細な分析的研究—」

小田藍生

ベルギーの建築家ヴィクトール・オルタ(1861-1947)は、アール・ヌーヴォーの先駆者の一人として知られている。彼の建築的思想の特徴は、建築を「総合芸術」として捉える点にある。すなわち、建物に合わせて、家具や絨毯のような室内装飾まで自分でデザインしたのである。この革新的なアプローチは、当時から今日に至るまで影響力を持っている。しかしながら、彼の家具はほとんど研究されていない。オルタを理解する上で最も重要な資料と考えられている『回想録 Mémoires』(彼が執筆したものを1985年にC・デュリエールが編集・出版)でも、家具の構想に関して断片的な記述しかない。

そこで本発表では、彼の家具について考察する。特に分析対象として椅子を取り上げる。オルタは様々なタイプの椅子をデザインしており、現存数も多い。そのため、椅子は彼の室内装飾に対する考えの本質を考察するのに最適なテーマであるだけでなく、アール・ヌーヴォーに関する彼の見方を理解する上でも有効な手段と言える。さらに椅子は、彼の作品の中でもよく目にする家具の一つで、ベルギー、フランス、アメリカの主要な美術館に所蔵されているほか、日本でも展覧会を通して紹介されている。

本発表では、まず、様々な構想段階の椅子のクロッキー(素描)とデッサン(図面)を詳細に分析する。次に、その着想源を探り、それらを通してオルタの思想を明らかにする。



## 「ベルギーにおける移民政策の変遷」

中條健志

本発表の目的は、20世紀のベルギーにおける移民政策の展開を概観することで、それぞれの政策が、どのような社会的情勢を背景にどのような動機で移民を受け入れ、彼(女)らをベルギー市民として統合(intégration)しようとしてきたのかを明らかにすることである。そこでは、とりわけ次の三つの時期を中心に検討する。すなわち、第二次大戦後から1970年代中頃まで(労働力不足、欧州統合の進展、および国境問題にともなう移民政策の変化)、1970年代中頃から1980年代後半まで(家族呼び寄せを背景に)、1990年代以降(庇護申請者の増加、非合法労働者問題、出身国の多様化を背景に)である。また同時に、各政策が議論される際に何が「(移民)問題」として語られていたのかについても指摘する。

## 「ベルギーのクルド人、クルド人にとってのベルギー」

松井真之介

「世界最大の少数民族」、「独自の文字と国家を持たない世界最大の民族」と言われる中東クルディスタンのクルド人。20世紀後半に中東各地の政変や戦争などの影響を受け、一気にディアスポラ化した彼らは、主に欧州にその行き先を定めた。最多はドイツだが、ベルギーも少なからずクルド人を受け入れている。彼らはどのようにしてヨーロッパに、そしてベルギーにたどり着いたのだろうか、そしてなぜベルギーを選んだのだろうか。本研究発表では、最初にクルド人について概説したあと、ヨーロッパへ向かい、ベルギーにたどり着いたクルド人について検討を行う。そして、クルド人にとって、ベルギーという国はどのような位置づけであり、どういう意味を持つのか。他のヨーロッパ諸国と比較して照射されるベルギーのクルド人コミュニティの特徴についても言及する予定である。

## 「ヘルドルプ・ホルツィウスのケルンにおける活動：八十年戦争期におけるネーデルラント芸術家の離散(ディアスポラ)と人的ネットワーク」

河内華子

八十年戦争期(1568-1648)、スペインと北部7州(後のオランダ)の争いによって荒廃したネーデルラントでは、多くの芸術家たちが活動の場を求めて他国へと流出する現象がみられた。本発表では、このような移民芸術家の一例として、ルーヴェン出身の肖像画家ヘルドルプ・ホルツィウス(1553-c.1618)のケルンにおける活動を取り上げる。

保守的なカトリックの地元有力者たち、プロテスタント色の強いネーデルラント商人たち、さらにはヨーロッパ各地で活動する芸術家たちといった多様な集団との関わりを通じて、画家はどのようにして移民先に足場を築いていったのか。宗教対立の時代に生きた芸術家の「生存の術」(kunst van het overleven)について、絵画作品と文字史料を通して考察する。

### 第65回研究会

日時: 2016年6月12日(日)13:30-17:30

会場: 西宮市大学交流センターセミナー室1

【発表1】「アール・ヌーヴォーの起源に関する考察—S.ピングとヴァン・デ・ヴェルデの対比から—」

白田由樹(大阪市立大学)

【発表2】「ルクセンブルク語における完了表現の文法化と動詞の過去形」

西出佳代(神戸大学)

【発表3】「第二次大戦期ベルギーにおける抵抗意識—雑誌『スピルー』の動向を中心に—」

曾我篤嗣(京都大学大学院)

## 発表要旨

「ルクセンブルク語における完了表現の文法化と動詞の過去形」

西出佳代

英語やドイツ語、フランス語などのヨーロッパ言語では、engl. have や engl. be にあたる動詞が完了の助動詞へと文法化 (grammaticalization) を起こし (英語では engl. have のみ)、過去分詞とともに完了表現として用いられる。

(1) a. engl. I have read this book.

b. dt. Ich habe dieses Buch gelesen.

c. fr. J'ai lu ce livre.

上部ドイツ語では、上記の完了表現がさらに過去時制を表す表現へと変わる文法化を起こしており、その傾向は標準ドイツ語にも及んでいる。

(2) a. engl. \*I have seen her yesterday.

(完了表現 have seen と過去の副詞 yesterday の共起不可)

b. dt. Ich habe sie gestern gesehen.

(完了表現 habe ... gesehen と過去の副詞 gestern の共起可)

本発表では、2015年に行った言語調査のデータをもとに、中部ドイツ語に属するルクセンブルク語における同変化の進行度合いを示す。また同言語変化がルクセンブルク語の統語構造や動詞の屈折体系に及ぼす影響について考察を加える。

「「アール・ヌーヴォー」の起源に関する考察—S.ビングとヴァン・デ・ヴェルデの対比から—」

白田由樹

本発表は19世紀末にフランスに伝播した「アール・ヌーヴォー」の用語および芸術運動としての起点をベルギーとの接点から再考察しようとする試みである。この語を普及・定着させたのは、1895年にS.ビングがパリで開いた美術工芸ギャラリーの影響力だが、その開業に先だってビングは他国の応用芸術の動向を視察し、とくにベルギーの前衛的な芸術運動に着想を得ている。この国で早くから使われていた《Art Nouveau》(という語は、とりわけビングの協力者となるH.ヴァン・デ・ヴェルデにおいては社会主義的な芸術改革のスローガンだったが、ビングの目的や意識はそれとは最初から異なっている。本発表では、この両者の理念的な共通点と相違点を、それぞれの背景となるコミュニティや社会の状況を視野に入れつつ対比する。またそこから「アール・ヌーヴォー」がフランス的な様式を示す語として変容していく要因についても言及したい。

「第二次世界大戦期ベルギーにおける抵抗意識—雑誌『スピルー』の動向を中心に—」

曾我篤嗣

第二次世界大戦期のベルギーにおいては、1940年の占領以後、フランス同様レジスタンス組織が地下活動を行っていた。組織の多くは独立戦線(Front de l'Indépendance)などの政治的組織であったが、本発表で取り上げるマンガ雑誌『スピルー』(Spirou)のように、活動を行っていないように見えながら、雑誌に掲載された作品等を通じてナチスへの抵抗を行っていた組織も存在した。

そこで本発表では、雑誌『スピルー』、とりわけ二度目の休刊を余儀なくされた1943年9月から復刊までの間に発行された『スピルー』系列の雑誌『レスピエーグル』(L'Espiègle au grand coeur)と『アルマナック44』(Almanach 44)の内容を分析することを通じて、従来はほとんど顧みられることのなかった雑誌編集者やバンド・デシネ作家の抵抗意識に着目し、彼らが行ったレジスタンスを明らかにしていく。

### 第66回研究会

日時: 2016年8月6日(日)13:00-18:00

会場: 明治大学 (駿河台キャンパス) 研究棟4F第三会議室

【発表1】「ベルギーの「ライシテ」—あるライフヒストリー・インタビューからの接近」

山口博史 (都留文科大学)

【発表2】「1945-70年ベルギーの社会構造—歴史政治学のアプローチ」

齋藤至 (東京大学出版会)

(前頁からの続き)

【発表3】「ヤン・ファン・エイク作《ロランの聖母》の制作年代について一服飾史からのアプローチを中心に」  
佐藤龍一郎(東京大学)

### 発表要旨

「ベルギーの「ライシテ」—あるライフストーリー・インタビューからの接近」

山口博史

この報告では、あるベルギー人のライフストーリーにかんする語りをとりあげる。とりあげるのはベルギーの「ライシテ」にかかわる語りの一節である。その語りから、ベルギーのライシテにどのような性質があるのかについての示唆が得られるだろう。また、なぜそのような語りが生み出されたのかを検討することで、ベルギーの「ライシテ」をとりまく社会的なバックグラウンドやこの言葉の歴史について理解の糸口を見出すことができるようになるだろう。報告では、フランスで語られる「ライシテ」との対比を行ないながら、ベルギーの「ライシテ」にみられる特徴やその歩みについて検討していきたい。また「ベルギーからの視線」でフランスの「ライシテ」をみたときに、そこにどのような側面をみいだすことができるのかについてディスカッションを行なってみたい。

「1945-70年ベルギーの社会構造—歴史政治学的アプローチ」

齋藤至

大陸ヨーロッパの小国は、内政上、多極性の維持と分離独立の阻止という難題に直面し、大国の影響を受けやすい脆弱性をもつ。その反面、「緩衝国家」として外交史の諸局面において重要な役割を果たしてきた。

こうした特徴をもつ小国は、近年、多文化共存の範例として注目されてきた。民族主義運動が地域の分離独立を招かず、結果として「国民国家」としての統合を維持し得ているのはなぜか。

本報告では戦後から1970年頃までを対象にベルギーの社会構造を概観する。比較政治学者ロツカンの「歴史政治学」、および経済史家フローラの歴史統計に拠って、政党配置の変容を経済構造・文化の観点をも交えて複眼的に検討する。

戦後ベルギーはキリスト教民主主義政党を要に、1950年代には保守系政党との連合による国際経済協力を、1960年代には社民系政党との連合による福祉国家化を推進した。1960年代以降には産業・就業構造の変化に伴い地域言語政党が勃興したものの、福祉政策が超党派的な取引材料として機能し、従来の政治秩序と国民統合が維持された。

「ヤン・ファン・エイク作《ロランの聖母》の制作年代について一服飾史からのアプローチを中心に」

佐藤龍一郎

《ロランの聖母》(パリ、ルーヴル美術館)は、ブルゴーニュ公フィリップ善良公(1396-1467)治下に活動した画家ヤン・ファン・エイク(?-1441)の手になり、画中には聖母子とともに本作品の注文主であるニコラ・ロラン(c.1376-1462)の祈祷像が描かれる。本発表は、本作品の制作年の再考を目的とする。制作年に関して、先行研究の多くは1430年代前半と1430年代後半に分かれるが、いずれの根拠も充分ではない。この状況に鑑み、本発表はロランの服飾に着目し、同時代の写本ミニアチュールとの比較を通して本作品の制作年の再考を試みる。上記の議論では服飾史による考察は殆どないものの、同時代の服飾に関する資料は比較的多く、それゆえこの視点は有意義であると考えらる。

発表内容は以下の通りである。検討対象は、ヤン・ファン・エイクが制作に関わったともみなされる『トリノ＝ミラノ時祷書』(トリノ、市立美術館などに分蔵)の祈祷者像、『エノ一年代記』の《献呈図》(ブリュッセル、ベルギー王立図書館)、ならびにその前後の時期の写本ミニアチュールの作例が中心となる。これらの作例に描かれる宮廷人の服飾の分析を通して、本作品の制作年がどのように位置付けられるのかを示したい。その結果は、制作年の再考に留まらず、本作品の構図を採用したとされるロヒール・ファン・デル・ウェイデン作《聖母子を描く聖ルカ》(ボストン、ボストン美術館)との制作順序の見直しなどより広い視座を提供する契機となるだろう。

## 第67回研究会

(金城学院大学キリスト教文化研究所主催シンポジウム)

日時: 2017年1月21日(土)14:00-18:00

会場: 金城学院大学サテライト

主催: 金城学院大学キリスト教文化研究所

共催: 日本ケベック学会、ベルギー研究会

テーマ: 社会における脱宗教(ライシテ)について考える—フランス、ベルギーそしてケベック(カナダ)

【発表1】「ライシテの起源-イタリア・ルネサンスを中心に」

立花英裕(早稲田大学)

【発表2】「フランスの政治文化としてのライシテ:近代の統治技法、あるいは共和国のイデオロギー?」

稲永祐介(大阪市立大学 / CNRS-GSRL 非常勤研究員)

【発表3】「ベルギーのライシテと宗教多元性—公教育における二つの論争から」

見原礼子(長崎大学)

【発表4】「ケベックの『開かれたライシテ』—自由主義と共和主義の狭間で」

丹羽卓(金城学院大学)

【発表5】「フランス、ベルギー、ケベックのライシテを比較する—成り立ちと現在の課題から」

伊達聖伸(上智大学)

## 第68回研究会

日時: 2017年2月19日(日)13:30-17:30

会場: 西宮市大学交流センター セミナー室2

【発表1】「15世紀末のブリュッセルを舞台にした聖人伝—《聖女カタリナ伝》と《ペテロ伝》について」

平岡洋子(明治学院大学)

【発表2】「ベルギー小話 *histoires belges* の背景と実状—フランス／オランダ／ベルギーのエスニック・ジョーク」

岩本和子(神戸大学)

岩本和子(神戸大学)

【報告】「日白修好150周年記念シンポジウムの報告」

石部尚登(日本大学)

## 発表要旨

「15世紀末のブリュッセルを舞台にした聖人伝—《聖女カタリナ伝》と《ペテロ伝》について」

平岡洋子

本発表は、15世紀末から16世紀初頭のフランドルにおける、一画面に数多くのエピソードを散りばめて物語を展開した“総覧型”説話主題の祭壇画を対象とし、そこに現れた新機軸、新たな画面空間の構成法を取り上げて論じる。

15世紀の初期フランドル絵画における空間構成の手法は、大前景と遠くに臨まれる「背景風景」との組み合わせであった。この独特の空間構成法はしかし、15世紀末の“総覧型”聖人伝、キリスト伝、マリア伝の新たな空間構成によって乗り越えられた。

本発表では特に、ブリュッセルで制作された《聖女カタリナ伝》《ペテロ伝》に焦点を当て、描きこまれた建築が当時のブリュッセルの建築であり、舞台は都市図であることを示したい。次いで、これらのブリュッセル舞台の聖人伝が初期フランドル絵画史上、総覧型聖人伝のなかでどのように位置づけられるかを、先行する聖人伝ならびに後代の、実見に基づく都市図やエルサレム図に影響を受けた祭壇画を見ながら考察したい。



ある特定の国民や民族の特徴をステレオタイプ化して笑い話にする、いわゆるエスニック・ジョークは世界中に存在するが、特にフランス人による「ベルギー人小話histoires belges」はその数も多く友人や親族の集まる場所で盛んに語られてきた。オランダ人による「ベルギー人ジョークBelgenmop」も同様である。

本発表では、小話で描かれる「ベルギー人像」のパターンを紹介しつつ、言語環境や中心一周縁の問題と関連させながら、この文化現象の歴史的背景や意味を探る。また昨今のメディア（テレビ、Webサイト、映画、BD など）による影響にも注目する。

#### 第69回研究会

日時: 2017年3月6日(月)13:30-18:00

会場: 神戸大学ブリュッセルオフィス

【発表1】「アール・ヌーヴォーの誕生 —ヴィクトール・オルタが初期にデザインした椅子の分析を通して(1896-1905)—」

小田藍生(ブリュッセル自由大学)

【発表2】「ベルギーフランス語メディアに表れる舌打ち音」

森田美里(大阪府立大学大学院・オルレアン大学大学院)

【発表3】“To Reform or Not to Reform? The Presence and the Future of Flemish Education”

Heidi Knipprath (KU Leuven)

【発表4】「ベルギー・ネーションビルディングに関する民族神話について」

上西秀明(ヘント大学)

【発表5】「ベルギーの多文化政策と移民問題」

津田由美子(関西大学)

【報告】「日白修好150周年記念シンポジウム」

中條健志(大阪市立大学)

#### 発表要旨

「アール・ヌーヴォーの新系譜—ヴィクトール・オルタが初期にデザインした椅子の分析を通して(1896-1905)—」

小田藍生

19世紀末から第一次世界大戦前までヨーロッパで流行したアール・ヌーヴォーは、美術と生活に関する運動である。その起源は旗手であるベルギー人建築家ヴィクトール・オルタ(1861-1947)がブリュッセルに建てた中産階級の住宅群に遡る。これらの住宅では新しい建築様式が用いられただけでなく、建物の全てが調和している。建物のファサードに加え、ドアや壁面装飾、家具といった室内装飾の細部までが、既製品に頼らず建築家の拘りでデザインされている。本発表では、アール・ヌーヴォーがいかにして誕生したのか、その様式やコンセプトがどのように発展したのかを探るため、オルタの様式や作品コンセプトを分析する。特に椅子を分析対象とする。なぜなら椅子の構造は単純で小さく、建築や大きな家具に比べて規制が少ないため、様式やコンセプトをはっきりと示しているからである。さらにこの重要な時期に彼は多くの椅子を制作しており(発表者の調査によると70モデル以上)、詳細な分析が可能である。まず、オルタが自ら家具を設計し始めた背景を、彼が尊敬していた建築家ヴィオレ＝ル＝デュクの著書をもとに紐解く。次に、当時の写真やオルタの『覚え書き』などを手掛かりとして、椅子の制作年代を特定する。年代順に彼の様式を分析し、設計コンセプトの発展と特徴を明らかにする。

※本発表は公益財団鹿島美術財団の助成により実現した研究成果の一部である。

## 「ベルギーフランス語メディアに表れる舌打ち音」

森田美里

発表者は、これまで単なる悪癖や雑音と思われてきた舌打ち音(歯茎吸着音)を研究している。この音は、フランス語母語話者には全くといってよいほど意識されていない音であるからか、ほとんど研究されてこなかった。舌打ちは日本語ではネガティブな感情の表出であるため、フランス語母語話者が出すこの音は、日本語母語話者とのコミュニケーションにおいて誤解を招く原因になる可能性がある。発表者のこれまでの研究では、フランス語の舌打ち音には、日本語の「舌打ち」とは異なる用法および機能があるということ、フランス人の話すフランス語の実例に基づき考察してきた。本発表では、ベルギーのフランス語メディア、とりわけテレビ番組でのベルギー人フランス語話者の談話を事例として挙げながら、現時点で考えられる舌打ち音の用法・機能について報告する。

## “To Reform or Not to Reform ? The Presence and the Future of Flemish Education”

Heidi Knipprath

After six years of discussions, the Flemish Government approved last January a plan to modernize secondary education. The government's plan has been highly criticized. Those who advocate reform, believe the government has no real intention to reform. Those who believe the Flemish education system is already performing well, argue that the government's plan has set sufficient high goals. In this presentation I discuss the characteristics of the Flemish education system and make comparisons with the Japanese education system when possible. In order to show the need to (not) reform, I address two issues during the presentation: inequality of educational opportunities and the need of graduates in STEM. STEM is an acronym for science, technology, engineering and mathematics.

## 「ベルギー・ネイションビルディングに関する民族神話について」

上西秀明

三つの公用語の存在と複雑な連邦制度。列柱化社会に端を発する現在の多党制政治システム。一見、日本人が想像しうる社会状況とは遠く隔たったところにある国家ベルギーである。しかし、今日的状況へとベルギー社会を作り上げた背景にはその特殊要因と同時に普遍的メカニズムも確かに存在している。現在、ベルギーを語る際に当たり前のものとして取り扱われる「フランデレン」や「ワロニー」といった言葉も、他国のネイション形成過程で見られたような創造(=想像)のプロセスがあった。ベルギー、フランデレン、ワロニーの形成過程の一旦を、記号としての「神話」に光を当てることで再検証し、ベルギーという国を前にした際の我々の立ち位置について再確認してみたい。

## 「ベルギーの多文化政策と移民問題」

津田由美子

19世紀から続く「多民族国家」性と20世紀末に現れた「多数エスニック国家」が交錯する現在のベルギーにおいて、多民族国家における多言語主義の政策が、必ずしも多文化主義を保障するものではないことを検証する。一般市民の無関心とエリート協調で築かれた多民族国家を維持してきた共存策は、外国人移民を含めた多数エスニック国家の市民権を自動的に尊重するものではない。むしろ、言語的に少数派意識の強いオランダ語系は、移民の存在によりオランダ語・フランス語の言語間バランスが変わることを警戒し、排他的な対応をとり新しい少数派の権利保障には消極的であったことが、外国人参政権の導入過程において明らかになる。また今日の連邦国家においては、多様なレベルで異なる移民統合政策が併存しているのも特徴的である。

## 刊行物の紹介

### ベルギーを〈見る〉 テクスト—視覚—聴覚

三田順 編著  
岩本和子・吹田映子・田母神顯二郎・的場寿光・武村知子 著  
松籟社、2016年11月20日刊  
定価：2,000円＋税  
ISBN：9784-87984-351-7

#### 【主要目次】

- 1 マーテルランクと絵画—『幼児虐殺』を通してフランドル性を〈見る〉— (岩本和子)
- 2 ベルギーにおける「現実的幻想」の系譜—文学と絵画における「ベルギー的」美学の源泉を求めて— (三田順)
- 3 1920年代末のポール・ヌジェとルネ・マグリットによるイメージ論—「孤立」をめぐって— (吹田映子)
- 4 インファンスの絵画 ミショールとドゥルーズ (田母神顯二郎)
- 5 アニメーションにおける幻想の系譜—ラウル・セルヴェの「抵抗」について (的場寿光)
- 6 C'est si loin mais ici—アンドレ・デルヴォーの映画を聴く (武村知子)

### Japan & Belgium: An Itinerary of Mutual Inspiration

Willy Vande Walle (ed.)  
Lannoo、2016年12月13日刊  
定価：€49,99  
ISBN：978-9-40143-842-1

### 幻想の坩堝(るつぼ) ベルギー・フランス語幻想短編集

岩本和子・三田順 編訳  
岡本夢子・小林亜美・松下和美・村松定史 訳  
松籟社、2016年12月9日刊  
定価：1,800円＋税  
ISBN：978-4-87984-352-4

#### 【収録作品】

- 夢の研究 (モーリス・マーテルランク／岩本和子訳)  
時計 (ジョルジュ・ローデンバック／村松定史訳)  
陪審員 (エドモン・ピカール／松下和美訳)  
分身 (フランス・エレンス／三田順訳)  
エスコリアル (ミシェル・ド・ゲルドロード／小林亜美訳)  
魔術 (ミシェル・ド・ゲルドロード／小林亜美訳)  
不起訴 (トーマス・オーウェン／岡本夢子訳)  
夜の主 (ジャン・レー／三田順訳)  
劇中劇 (マルセル・ティリー／岩本和子訳)

### 【フランダースの声シリーズ】

#### 火曜日

ペーテルス・エルヴィス 著  
鈴木民子 訳  
松籟社、2016年10月27日刊  
定価：1,800円＋税  
ISBN：978-4-87984-349-4

#### モンテカルロ

テリン・ペーテル 著  
板屋嘉代子 訳  
松籟社、2016年10月27日刊  
定価：1,700円＋税  
ISBN：978-4-87984-350-0



ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第5号

発行:2017年5月

編集:井内千紗

事務局:神戸大学大学院国際文化学研究科 岩本研究室

ウェブサイト:<http://www40.atwiki.jp/kbek/>